

第5回(p4) <http://pombo.free.fr/me1848.pdf>

La grande industrie a créé le marché mondial, préparé par la découverte de l'Amérique. Le marché mondial a accéléré prodigieusement le développement du commerce, de la navigation, des voies de communication. Ce développement a réagi en retour sur l'extension de l'industrie; et, au fur et à mesure que l'industrie, le commerce, la navigation, les chemins de fer se développaient, la bourgeoisie se développait décuplant ses capitaux et refoulant à l'arrière-plan les classes léguées par le moyen âge.

大工業は、アメリカ大陸の発見によって準備された、今日の世界市場を創った。今日の世界市場は、商業の発達とか航海の発達とか陸上交通の発達とかというものによって、どんどん大きくなった。その交通通信手段の発達が、今度はまた産業の発展に寄与する。そして産業や商業や航海や鉄道の展開するに合わせて、ブルジョア階級がその資本を増大させつつ、中世からの受け継いだ全ての階級を背後に押しやりながら、発展した。

巨大産業がなかったら、巨大市場はないですね。communication は、今は通信の意味でしか使わないと思っている人がいますが、もの運ぶことを言ってるんですね。運輸経路とか鉄道ができたってことですよ。

en retour は、自分の順番で、そのお返しに。

au fur et à mesure que は、au fur que と à mesure que で、代名動詞 se développaient 自らを展開する、発展するのに合わせて、que 以下のことに合わせて。

ブルジョア階級は新興の商業資本・産業資本に過ぎないわけですね。中世には本当に農奴の一つの形態あるいはそれ以下の連中に過ぎなかったわけですけど、その人たちが産業革命に乗じて中世のものをすべてなぎ倒しながら成長していく、っていうありさまを述べてるわけですね。

La bourgeoisie, nous le voyons, est elle-même le produit d'un long processus de développement, d'une série de révolutions dans le mode de production<sup>1</sup> et d'échange.

われわれは、ブルジョア階級自身も一つの長い発展過程の産物であり、生産様式と交換様式における一連の革命の産物であることを知る。

ここで大事なことは、révolutions は一つじゃないんですよ。もう沢山の連の多くの革命のプロセスがあり、色んなものが次々と倒れ、交代していった、政権交代っていうか。そういうプロセスの中でも最後に登場したものに過ぎないということです。革命という言葉で勝手にロマンティックに色々なことを想像するからいけないので、回転という意味に過ぎないんですよ、révolutions はもともと。もちろん劇的な変化っていう意味にこの場合はなるんですけど。生産と交換の様相における様々な一連の大転

換の長い歴史のプロセスの結果に過ぎないと。いや革命っていうのはずっと革命だったんですよ。日本でも例えば平城京とかいう奈良時代だって聖徳太子革命ってあったわけでしょ、中大兄皇子とか藤原鎌足とか。平安の時には天皇と貴族の間の大戦争ですよ、後鳥羽上皇とか応仁の乱なんて革命じゃないですか。源政権という鎌倉幕府ができた時には本当に人々の心を一新するって言うような、そういう斬新さがあったんじゃないですかね。武士の革命があって、しかし武士同士の争いはその後起こった室町時代があって、今度は戦国時代になった。ある意味では庶民が一番苦しかったかもしれませんね。織田信長が出てきたというのは、ある意味で人々ならこれやっとなんて平和になるって思ったかもしれません。織田信長による天下統一というのは大革命で、秀吉も大革命だし、徳川の革命というのは一番徹底してしかも格別だったんじゃないですかね。権力交代って言うので普通は歴史を語っちゃうんですよ。だけどマルクスエンゲルスはそうじゃない。権力の交代ではなくて生産力と生産手段、あるいは生産関係、それが変わっていったんだと。それこそ社会の底辺において進行した革命であって、政治権力のトップの交代だけを見てたら歴史の本質は見えない、そういうふうに彼らは言ったわけです。だから彼らは科学的社会主義といったわけね。歴史をその権力の交代みたいなものとしてしか語らないんだとすれば、それは科学にならないと、マルクスエンゲルスは思った。哲学・医学もそんなもの科学じゃない、数学と物理が科学だと。一種の文化上の革命ですね。それが17世紀に起こった。それが言ってみればその上部構造の大きな革命ですけど、マルクスエンゲルスに言わせれば、そういうことによって実は下部構造が変わったのだと。生産力が増大しそして人がものを作るという、その関係そのものに大きな変化が起きた。

p4<註1>

Le mode de production des biens matériels dépend, d'une part, des forces productives (instruments de production, méthodes de travail, travailleurs) et, d'autre part, des rapports de production établis entre les hommes (servage, salariat, etc.).

材料を使ってもものを作る生産様式は、片や、生産力に依存している。(生産力とここで言っているところのものは、主に3つである。道具、労働の方法、労働者の質)。もう一つでは、人々の間で確立された生産関係に依存している。(この人々というのは奴隷であるか賃金労働者かいろんな関係あります)。

生産力と生産関係の矛盾が、資本主義社会を、すべての世の中を変革する原動力となる。ブルジョア階級とプロレタリアートとすごい貧困な階級対立ですよ。だからマルクスはそんなもの革命によって必ず終わると。ブルジョア階級っていうのは階級的になり得るはずがないと。

Dans le *Manifeste*, Marx n'intègre pas toujours les ouvriers aux forces productives auxquelles il donne plutôt le sens de «moyens matériels de la production».

党宣言の中で、マルクスは常に労働者を生産力として統合していない。彼は、《生産のための物質的な手段》の意味をせいぜい与えているだけである。

労働者が生産してるんだっていうふうに思っている人よくいますよね。だけどマルクスは生産力っていうふうに言ったときには、その労働者はその一部分でしかなくて、その生産のための手段とか道具とかそういうものに関係しているし、労働の在り方っていうのも関係してる。単なる労働者たちがそのまま生産力になっているわけではない。資本主義の中での労働者というのはそういうものになっちゃう、サーリーマンとか。金で雇われているわけですから、マルクスエンゲルスの言えれば娼婦と一緒になんですよ、企業の労働者っていうのは。

D'où l'ambiguïté du, vocable à ce niveau.

上記のことからこのレベルの言葉の曖昧さが由来している。

言葉の曖昧さというと、その生産力というのと労働者の生産にかかる労働とかっていうのははっきりしてないってことじゃないんでしょうかね。労働者を純粋な労働力っていうかそういうふうに見做してくれれば、それはそれで話はスッキリするんだけど、マルクスはそうしていないって言うんですよね。

だからどうも言葉の上ではっきりしないっていうのがこの人の註じゃないでしょうか。

例えばその生産様式っていうのはいったい何なのかということですね。マルクスエンゲルスは生産様式という言葉を使ってるから、生産様式は何かって言えば、それは当然片や生産力、片や生産関係であると。でも共産主義者が答える基本テーゼですよ。マルクス自身は共産党宣言の中では生産力と労働者を直接結びつけてないんですね。労働者は単なる生産のための物質的な手段、という意味でしか使われてない。純粋にまさに資本主義社会における労働者って物質生産手段でしかないじゃないですか。コマって言えば兵隊ですよ、軍隊いえば、将棋で言えばコマって言ってもいいかもしれませんが。要するに、共産党宣言の中でも、マルクスは決してその抑圧された労働者対抑圧するブルジョア階級っていう、そんな二項対立なものを見てないんですよ。だから産業革命の中で結局労働者が賃金労働者になっちゃった、職人が。

抑圧者と闘うとか、弾圧されている人たちと連帯するとか、か弱気ものと連帯するとか、そういう運動って当然あっていいんですよ。だけど共産主義っていうのはそれとは違うんですね、理想が。抑圧なき社会を目指しているんじゃない。そうじゃなくて、私たちの喜びのある日々を取り戻すっていうことを目的としている。生きていることの喜び、労働することの喜び。

マルクスに言わせれば、あらゆるところに共産主義という妖怪がいるわけで、妖怪というよりもオバケって訳せば良かったですね。要するに共産主義はお化けなんですよ。何でも共産主義になっちゃうわけですよ。自分の政敵は全部共産主義者っていうふうに。共産主義者の中でも自分の敵は共産主義。

マルクスはルンペンプロレタリアートをすごく嫌ったんですけど、一番抑圧されるこの層ですよ。社会の最底辺にいるプロレタリアートね。彼らは革命の担い手になりえない。それは自分たちに誇りが無いから。誇りのない奴に革命の希望を託すことができない。この辺がマルキストとキリスト信者との大きな違いで、キリスト信者は最もか弱きものの横にいて、彼らは解放するとは一言を言わない、だけどわたしたちは常にあなたたちと共にある、とそういう感じでいくんですよ。どちらもかなり過激な思想だと思うんですけどね。日本ではどちらの思想も正しく理解されていないですね。キリスト教のことを博愛主義だと訳す馬鹿がいて、だけどキリスト教はマザーテレサが典型的なんですよ。要するにもっとも社会の中で抑圧され罪深い人々、そういう人たちと共に生きるのが自分たちの生き方だと、そういう発想で、キリストの示した生き方そのものだと思うんですけど。かなり過激な思想ですよ。だから豊臣とか織田とかそういう時の政権がキリスト教の弾圧に回ったのは、わかる気がしますね。こいつら調子に乗せたら大変なことになると。怖いもの知らずですからねえ。非妥協的ですから。共産主義者もこういう意味ですごく非妥協的なんです。そういうところが普通の常識人からすると恐怖の対象になるんですよ。それは自分たちの力が奪われるから、そういうんじゃないんですね。要するに存在を否定されてるからなんですよ。お前たちなんか人間じゃないと言われてる。だからキリスト教を弾圧した権力者も共産主義者を弾圧した人たちも根は同じだったと思います。コロナでマスクをかけてマスク警察をやっているような人たちは、やっぱり共産主義者の敵でありやっぱりキリスト者の敵であるんだと思うんですね。私から見ると私なんかはその二つの中間で生きてきたので、二つの思想はともに非常に極端な極左というか、エクストリミストの思想で、だからこそ恐れられたのだと思います。彼らが自分たちのいい思いしている生活が奪われるからでなくて、彼らの生き甲斐、生き様を全否定されているからですよ。

なぜ恐れられたか、それは自分達の存在が指定されるからっていうのがぼくの答え。